

大麦管理情報 (第7号)

令和7年4月15日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過 (図1)

- (1) 3月：平年に比べ、平均気温は8.4℃（平年差+1.5℃）とかなり高く、降水量は154.5mm（同比94%）、全天日射量は12.3MJ/mm/日（同比103%）と並であった。
- (2) 4月上旬：平年に比べ、平均気温は10.8℃（平年差+0.5℃）と高く、降水量は27.0mm（同比52%）と少なく、全天日射量は14.6MJ/mm/日（同比98%）と並であった。

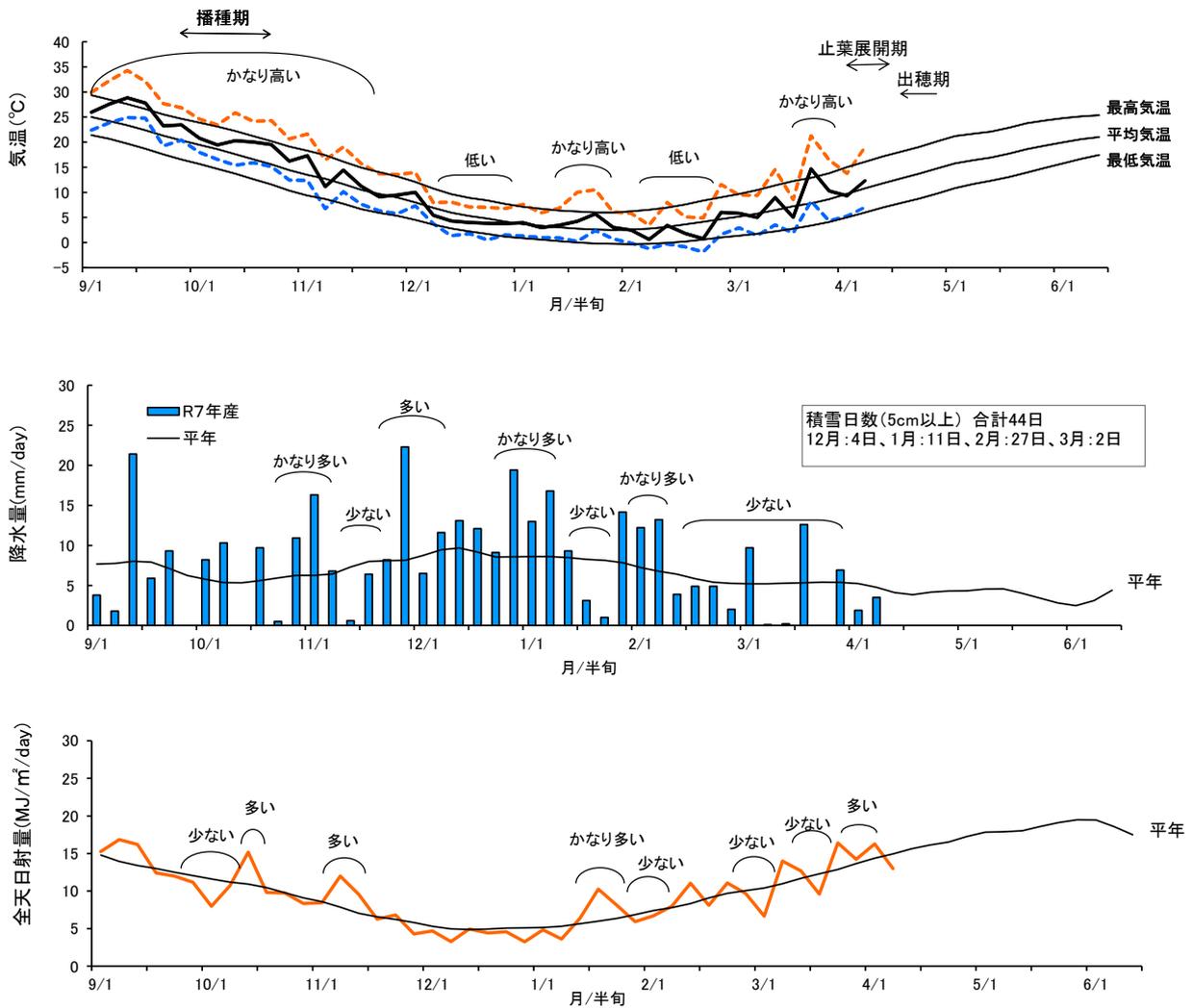


図1 令和7年産大麦生育期間の気象経過 (富山地方気象台)

2 生育概況

- (1) 平年に比べ、草丈は短く（平年比80%）、 m^2 当たり茎数は並（同比104%）となっている。また、葉色は並（同差-0.8）であるが、ほ場や生育ステージにより差がみられる（表1、図2、3）。
- (2) 平年に比べ、幼穂長は短く（平年差-0.5cm）、止葉展開期は平年に比べ6日遅い4月10日と推定される。また、出穂期は早いところで4月17日頃、平均で4月21日頃と見込まれる（表1・2）。

表1 大麦生育観測ほ等調査結果（4月15日）

（播種様式：ドリル）

年産	播種期 (月/日)	苗立数 (本/ m^2)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長 (cm)
				(本/株)	(本/ m^2)			
R7年産	10/2	169	56.1	3.0	508	14.8	43.1	3.8
R6年産	10/7	167	77.9	2.7	430	14.1	45.0	4.7
平年	10/6	175	70.1	2.8	490	13.6	43.9	4.3

注) 調査ほ場数：10、平年はH27～R6年産の平均

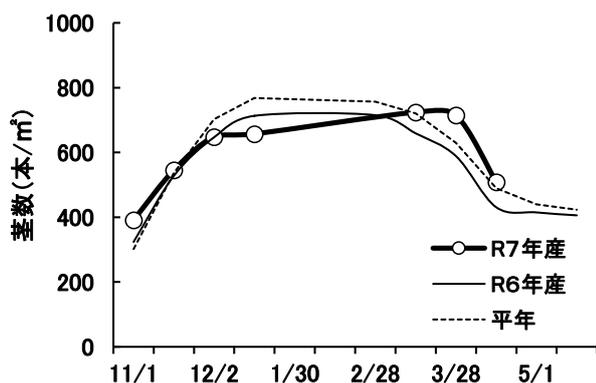


図2 茎数の推移

注) 平年はH27～R6年産の平均

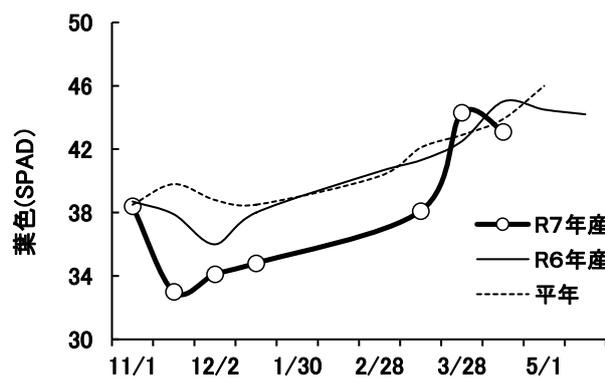


図3 葉色の推移

注) 平年はH27～R6年産の平均

表2 生育ステージ及び成熟期見込み（4月15日現在）

年産	止葉展開期 (月/日)	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)
R7年産	4/10 (4/6～)	4/21	—
R6年産	4/2 (3/30～4/6)	4/12 (4/10～16)	5/26
平年	4/4	4/15	5/30

注1) R7年産の止葉展開期及び出穂期の値は予測値

注2) () 内は、調査結果の幅を示す。

注3) 平年はH27～R6年産の平均

3 当面の技術対策

- ① 赤かび病防除の徹底
- ② 排水対策の徹底
- ③ カラスノエンドウ種子等の混入防止（刈取り前の抜取り）

（1）赤かび病防除の徹底

- ・ 検査規格における赤かび粒の混入限度は0.0%と厳しい基準となっているため、赤かび病の防除を徹底する。
- ・ 積雪期間等により地域やほ場による生育のバラつきが大きいことから、必ずほ場ごとの出穂状況を確認し、最も効果的な防除時期の穂揃期（開花始め：出穂3～5日後頃）とその7日後の2回防除を徹底する（図4）。
- ・ 防除適期に降雨が多い場合でも、短い晴れ間を利用し、確実に適期防除を実施する（図5）。
- ・ 防除効果は液剤の方が高いため、特に1回目の防除は、可能な限り液剤を使用し、規定量の薬剤が確実に付着するように散布する（図6）。
- ・ 防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。
- ・ 無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。

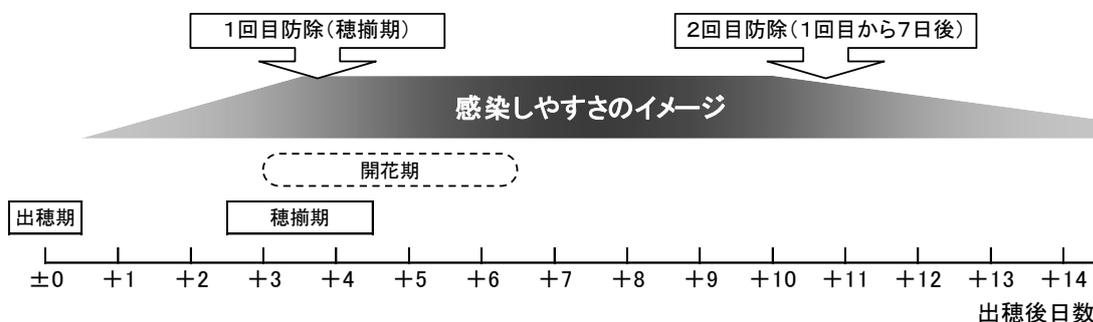


図4 赤かび病の感染しやすさのイメージ

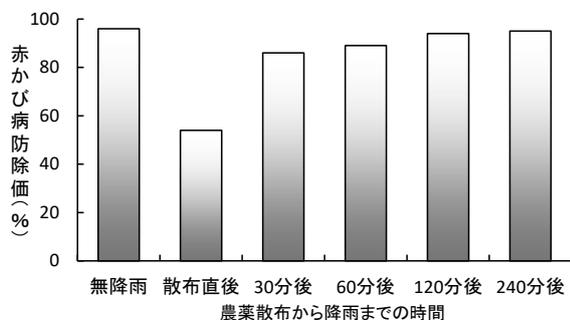


図5 農薬散布から降雨までの時間が防除効果に及ぼす影響

注) 防除薬剤：トップジンM水和剤
降雨は強い雨（25 mm/h）を2時間継続して実施
（農研機構 九州沖縄農業研究センター）

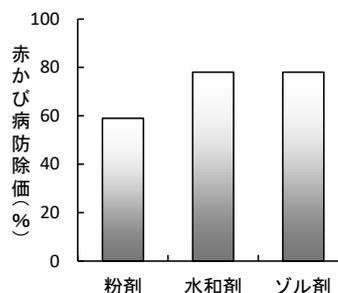


図6 トップジンMの剤型による防除効果の違い

（農研機構 九州沖縄農業研究センター）

表3 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数(倍)	10a当たり散布量	使用時期(収穫前日数)	使用回数	RACコード※3
1回目: 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4kg	14日	3回以内※2	1
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	3、DMI
2回目: 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500	150L	30日	3回以内※2	1
		トップジンMゾル※1	1,500	150	14		
		シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	
		チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1	3、DMI
		ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	
		ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3	11、QoI
	(無人航空機による散布)	トップジンMゾル※1	8	0.8L	21日	3回以内※2	1
		シルバキュアフロアブル	16	0.8	14	2	3、DMI
チルト乳剤25	8	0.8	21	1			
ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3			
ミラビスフロアブル	8~16	0.8	14	2	7、SDHI		

※1 取扱メーカーによっては、適用がないので注意する。

※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。

※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する。

QoI 剤は1作期1回までの使用とする。DMI 剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。

(2) 排水対策の徹底

登熟期間の停滞水は登熟不良につながることから、用水路や隣接田から漏水がないように、水口や畦畔を点検するとともに、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底し、湿害を確実に回避する。

(3) カラスノエンドウ種子等の混入防止

- カラスノエンドウの種子やハマダイコンの莢が大麥の収穫物に混入すると収穫後の選別が困難である。また、実需者からは異物混入防止の徹底が強く求められている(写真1、2)。
- カラスノエンドウはほ場周辺からほ場に侵入するため、ほ場周辺で発生がみられたら、速やかに除去する。また、ほ場で発生がみられた場合は確実に抜き取る。



写真1 大麥に絡みついたカラスノエンドウと種子



写真2 大麥ほ場畦畔に植生するハマダイコンと種子

(4) 適期刈取りに向けた準備の徹底

成熟期は平年に比べ遅いと見込まれるが、登熟期間中にフェーン等が発生した場合は、成熟期が早くなることから、コンバインや乾燥調製施設の受入れ等の準備は早めに行う。